２０２１年１１月８日（月）

老球の細道６３９号

下馬評を覆す

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

「下馬評」とは当事者以外の第三者や他人が、ある物事や人物について、興味本位に話し合う予想、批評などを示す言葉として使われている。

「下馬」とは、そもそもは江戸時代で「馬から下りること」を意味していた。お城の門や寺社の前で、馬から下りる場所を「下馬先」と呼んでいた。当時、武士や公家などの支配層にとっては馬が主な移動手段であり、城や屋敷、寺社などでは現在の「駐車場」のように、馬をつないで置く場所が決められていた。相手先を訪問する主人に付き添ってきた供の者たちが、主人の下馬先で主人を待つ間、あれこれと主人の噂や人事などを話し合ったことが「下馬評」の由来になったと言われている。

これが転じて現代では、一般的に、自分とは直接かかわりのない問題について、しかも「専門外」でいながら、面白半分に行う先々の展開や結末の予想、といった意味合いとして使われている。スポーツの世界でも優勝や勝敗を予測する時によく使われている。この下馬評が覆されることや覆すことに、私は至福の喜びを感じる。

今回の自民党総裁選挙の結末、そして今シーズンのプロ野球セパ両リーグ優勝チームのアップセットはまさに下馬評を覆す出来事であった。

セリーグの優勝はヤクルト。監督は高津臣吾。就任２年目で、２年連続最下位であったチームを頂点に導いた。際立っていたのは選手に対する細かな気遣いであったそうだ。特に不調の選手には励ましの声をかけ続けたという。パリーグの優勝はオリックス。監督は中嶋聡。これまた就任１年目で２年連続最下位だったチームを優勝へと躍進させた。育成と勝利の両方を追い求めて、２軍でくすぶっている選手や若手を積極的に起用し、選手たちが伸び伸びとプレイできる環境を整えた。プロの世界でも指導者が変わるだけで、最下位のチームが短期間で優勝するまでになってしまうことがあるのだから凄いし、励みになる。

一方、先日会津若松で開催されたウインターカップ県予選会では下馬評が覆されただろうか。男女共福島東陵高校が優勝という結果に終わったが、全体的に見ると大勢に大きな影響のない結果に終わっていたようである。特に地元会津地区の高校に元気がなかったのは残念だった。優勝、ベスト４に入った他地区のチームに会津地区出身の選手が何人かいたので、なおさら残念無念だった。

ここ数年福島県の勢力分布は全国的な傾向と同じく私立高校優勢の時代が続いている。そしてさらに、それらの高校には県内の優秀選手だけでなく県外からも力のある選手が集まって来ている。全国的な傾向でしかたがないとあきらめればそれまでである。

指導者はバスケットボールを通して人生や生き方も指導している人がほとんどだと思う。「不可能を可能にする」「途中であきらめないで最後までチャレンジする」「目標を高く持て」などと私も選手を叱咤激励したが、「下馬評を覆す」チャレンジはやりがいがある。